



桜の木の下で

村山 早紀

プロフィール

93年、幼年童話『ちいさいえりちゃん』でデビュー。シェーラ姫シリーズ全20巻はじめ、著書多数。HPでは猫の飼い方まで指南する無類の猫好き。

ひさしぶりに、ゆりちゃんが帰ってきた。

「ただいま、さくら。あいかわらず、真っ白で、きれいだねえ」
玄関に迎えに行ったあたしの頭を、優しくなでてくれる。
「いくつになっても、かわいいねえ」

ゆりちゃんもね。あたしは心の中でそういつて、のどを鳴らしながら、ゆりちゃんをみあげる。

ゆりちゃんは、あたしと同じで十五歳。

あうのは、何年ぶりだっけ。ガッコウがシリツで遠いから、このうちにはあんまりこれなくなっちゃった。あうたびに大きくなるみたい。背丈がのびて、おとなのひとみたい。奥からおばあちゃんたちが、お帰りなさいってゆりちゃんにいいながらでてきた。みんな嬉しそう。今日は大みそか。この家に、おばあちゃんのシンセキのひとが集まる日だ。ゆりちゃんがおとなっぽくなったと、おばあちゃんやみんなが声を上げる。あたしもうなずく。しっぽをたてて。荷物を持って上に上がってきたゆりちゃんの足に、あたしはそっと頭をこすりつけた。

ゆりちゃん。十年前、はじめてこの家であったときは、あたしは五歳。ゆりちゃんも五歳。同じ年でもあたしは猫で、ゆりちゃんは人間だったから、あたしはもう立派なおとなで、小さなゆりちゃんのお姉さんみたいだったね。あのときも大みそか。雪が降って寒い夜。あたしは寒がりの小さなゆりちゃんの胸元にだっこされて、あつためてやったっけ。昔を思いだしてのどを鳴らしていると、おばあちゃんがそっと、あたしの頭に手を乗せて、ゆりちゃんにいった。「さくらはすっかり年を取ってしまった。もう一日寝てばかりなんだよ。おばあちゃん猫さ」

失礼ね。あたしはしっぽをぶんと振った。

夕方が近づくにつれて、おばあちゃんの家の中は、おとなと子どもでいっぱいになった。お台所には、おかあさんやおばちゃんたちがぎゅうぎゅうになって入って、それぞれにお料理をしている。お父さんやおじさんや、子どもたちが、できあがったお皿を、お部屋に運んでくる。テレビはニュースが終わって、コウハクウタガッセンが